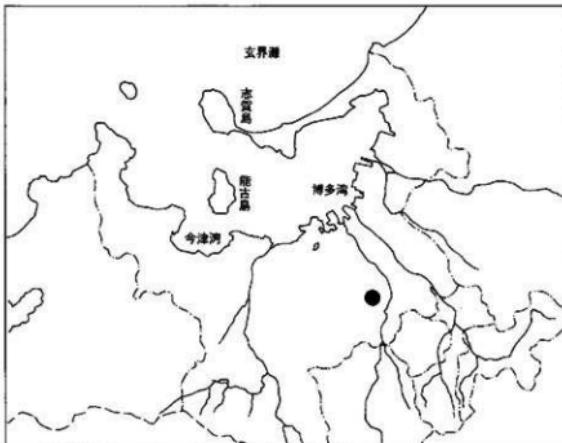


# 大橋E遺跡4

— 大橋E遺跡群第4次調査 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第511集



遺跡番号：OOE-4  
調査番号：9547

1997

福岡市教育委員会

## 序

福岡市は古くから大陸との対外交渉の窓口として発展してきました。このような環境のもとに多くの文化財が残されています。本市におきましてはこの保護に務めています。

本書は南区大橋における共同住宅建設に伴い実施された埋蔵文化財発掘調査の記録です。調査の結果、貴重な成果を得ることができました。学術的な調査報告書としては満足できるものではありませんが、埋蔵文化財保護のご理解に役立てば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり多くの方々のご理解、ご協力を賜りましたことに対し、心より感謝の意を表する次第です。

平成9年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 町田 英俊

## 例　　言

- 本書は福岡市教育委員会が南区大橋における共同住宅建設に伴って発掘調査を行った大橋E遺跡の第4次調査報告書である。
- 本書に使用した方位はすべて磁北である。
- 本書に掲載した遺構の実測・製図は中村啓太郎・白井克也が行った。
- 本書に掲載した遺構の写真は白井が撮影した。
- 本書の執筆は白井の協力を得て中村が行った。

|      |       |
|------|-------|
| 調査番号 | 9547  |
| 遺跡略号 | 00E-4 |

## 目　　次

|                 |   |
|-----------------|---|
| Iはじめに.....      | 1 |
| 1　調査にいたる経過..... | 1 |
| 2　発掘調査の組織.....  | 1 |
| II位置と環境.....    | 1 |
| 1　位置と環境.....    | 1 |
| 2　これまでの調査.....  | 5 |
| III調査の記録.....   | 5 |
| 1　調査の概要.....    | 5 |
| 2　旧河川.....      | 5 |
| 3　溝及び鉢状遺構.....  | 5 |
| 4　ピット.....      | 6 |
| 5　おわりに.....     | 7 |

## I はじめに

### 1 調査にいたる経過

1995年8月22日、末次正明氏より、福岡市教育委員会埋蔵文化財課に南区大橋4丁目における共同住宅建設計画のため埋蔵文化財事前審査願が提出された。これを受けた埋蔵文化財課では、同年11月21日に試掘調査を行った。その結果、申請地内に設定したトレンチにおいて、溝、ピット等の遺構が確認された。その成果をもとに協議を行ったが、現状での保存、設計変更は困難という結論に達し、記録保存のための発掘調査を行うことになった。尚、本末は第2係の担当であるが、都合により第1係が担当することとなった。発掘調査は1995年12月18日より開始し、同年12月28日に無事終了した。

最後になりましたが、発掘調査を行うにあたり、地権者である末次正明氏をはじめ、栄光不動産、工事関係者の方々には多大なご協力をいただいた。記して感謝いたします。

### 2 発掘調査の組織

|      |  |
|------|--|
| 調査委託 | 末次正明                                     |
| 調査主体 | 福岡市教育委員会                                 |
| 調査総括 | 埋蔵文化財課 課長 荒巻輝勝<br>第1係長 横山邦継<br>第2係長 山口譲治 |
| 庶務担当 | 内野保基 西田由香                                |
| 事前審査 | 山崎龍雄 池田祐司                                |
| 調査担当 | 中村啓太郎 白石克也（現東京国立博物館）                     |
| 整理作業 | 有吉知栄子 池田礼子 柴藤理江                          |

## II 位置と環境

### 1 位置と環境

大橋E遺構は、福岡市南区大橋4丁目に所在する。福岡平野を貫流する那珂川の西岸500m程に位置し、標高約10mをはかる。調査区は遺跡の北端近くにあたる。今回を含め、4次にわたる調査が行われているが、遺跡の性格を決定づけるに至っていない。

周辺の遺構についてみると、北東から野間A遺跡(2)、弥生時代中期の集落跡である野間B遺跡(3)がある。西には大橋A～D遺跡(4～7)が存在する。縄文～弥生時代の集落跡と考えられているが、詳細は不明である。1997年に調査が行われた三宅鹿寺(8)では瓦溜、布堀りの縄柱建物、3×4間の建物、溝、土壇等が検出され、遺物は老司I式を主体とする瓦類、埠、輸入陶磁器、木簡、石帶巡方、ガラス製品等が出土している。7世紀後半～9世紀前半まで続いた寺院跡で規模は東西100～110m程度と考えられている。またその関連遺跡として三宅瓦窯跡(9)や岩野瓦窯跡(10)が知られる。南西には和田A・B遺跡(11・12)、南には三宅B・C遺跡(13・14)、弥生～中世の集落跡と考えられる野多目A遺跡(15)が存在する。東には老司B遺跡等が存在するが、詳細は不明である。このように周辺地域においても宅地化が早かったためか、調査事例は少なく、その存在は知られているものの詳細は明らかにされていない。

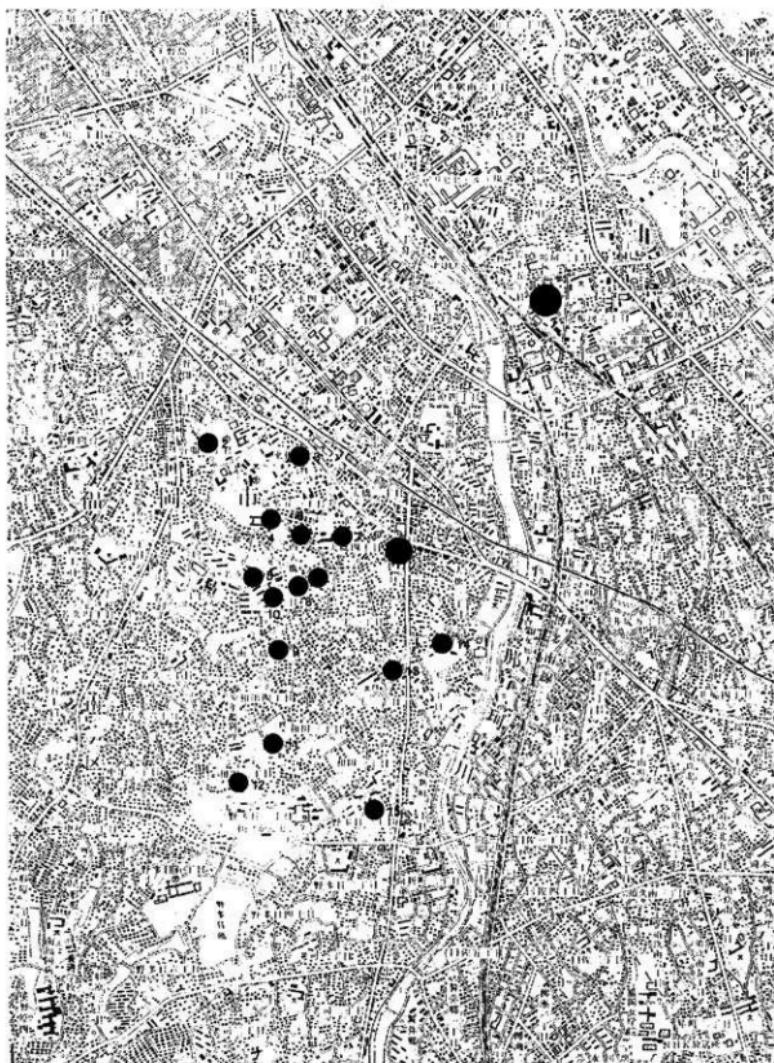


Fig. 1 馬辺遺跡分布図 (1/25,000)



Fig. 2 大橋E遺跡第4次調査区 (1/4,000)



Fig. 3 第4次調査構造配置図・南壁土層図 (1/200・1/80)

## 2 これまでの調査

- 第1次調査 1986年実施。公園建設に伴う調査。土壙、柱穴等を検出した。遺物は弥生時代中期の土器が出土している。また包含層より細形銅剣の鋲型片が出土したことは特筆される。
- 第2次調査 1988年実施。公園拡張に伴う調査。土坑、溝状造構等を検出した。遺物は弥生土器、土師器、青磁、新羅系土器、瓦等が出土しており、遺跡の周囲に官衙施設が存在する可能性が指摘されている。
- 第3次調査 1990年実施。共同住宅建設に伴う調査。土壙、溝、柱穴、墓塚状の堀込みを検出した。遺物は土師器、須恵器、瓦等が出土した。

## III 調査の記録

### 1 調査の概要

調査区は遺跡のほぼ北端に位置し、調査面積は580m<sup>2</sup>である。調査は北東側の450m<sup>2</sup>を始めに行い、その後反転し、南西側の130m<sup>2</sup>を行った。検出した造構は縄文時代後期～晩期の旧河川1条、古代と考えられる溝状及び畝状造構13条、近代～現代のピット等である。尚、調査区南西部の130m<sup>2</sup>については時間の都合上、検出面でプランを確認し、一部を掘削したにとどまった。基本層序は(1)現代整地層。地表下60～70cm。(2)暗青灰色粘質土。砂粒を多く含む。20～40cm。(3)茶褐色粘質土。10～20cm。(4)黒褐色粘質土。遺物包含層。5～10cm。(5)暗茶褐色粘質土。遺物包含層。20～30cm。(6)暗茶褐色砂質土。10cm程度。(7)暗褐色砂質土。10～20cm。(8)暗黄褐色粘質シルト。地山の上を利用した整地か。10～20cm。(9)黄色シルト。地山となる。

### 2 旧河川

#### SD001

調査区北端で検出された。西から東に向けて流れていったとおもわれる。時期は縄文時代後期から晩期にかけてと考えられる。

### 3 溝状・畝状造構

#### SD002

東西に延びる。SD003に切られる。底面は部分的に波板状を呈す。幅50～150cm、深さ5～20cm、底の窪みの間隔は10～30cmを測る。

#### SD003

東西に延びる。SD002に切る。幅70～190cm。深さ13～65cmを測る。

#### SD004

東西に延びる。SD002に切られる。幅50cm程度、深さ12cm前後を測る。

#### SD005

SD003の北に位置し、東から西に延び、その後南に屈曲する。幅50～60cm、深さ10～25cmを測る

#### SD006

SD002に切られる。幅90～120cm程度。深さ12～55cmを測る。埋土の堆積状況は上層では粘質土、下層では砂とシルトの互層となり水が流れていることを示す。

**SD007**

南北に延びる。長さ290cm、幅18~30cm、深さ12cmを測る。

**SD008**

東西に弧を描くように延び、SD006に切られる。底面は西部が波板状をなす。幅100cm程度、深さ9~25cm、底の窪みの間隔は15~30cmを測る。

**SD009**

南北に延びる。底面は波板状をなす。幅85cm程度、深さ6~18cm、底の窪みの間隔は10cm程度を測る。

**SD010**

南北に延びる。SD011、SD012を切る。幅70cm程度、深さ15~24cmを測る。

**SD011**

西側は溝状になり、東側は上面を削平されている。底面は波板上を呈す。幅40~170cm程度、深さは溝部が10cm程度、土壤列は長さ50~110cm、幅30~50cm、深さ10~20cm程度、土壌の間隔は20~50cm程度を測る。

**SD012**

東西に延びる。幅55~100cm、深さ18cmを測る。SD011と組合ひ、SD003と対をなすものか。

**SD013**

調査区南端に位置する。幅90cm程度、深さ30cmを測る。DS006と対をなすものか。

**SD014**

東西に延びる土壤列。本来は溝上か。各々は長さ75~130cm、幅15~50cm、深さ10~20cm、各土壤の間隔は25~60cmを測る。

#### 4 ピット

調査区内において多数のピットを検出したが、大半は木の根等で人為的なものではなかった。その他は近現代のもので建物等にまとまるものはなかった。

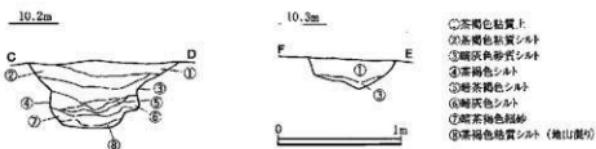


Fig. 4 SD006土層図 (1/40)

## 5 おわりに

今回の調査では旧河川、溝状・歎状遺構（土壌列）等が検出された。旧河川については縄文時代後期～晩期と考えられ、周辺に遺構が存在する可能性がある。溝状・歎状遺構の時期については今回、都合により遺物を掲載できなかったが、出土須恵器等から7世紀代とおおわれる。その性格については、形態、並走関係、組み合わせ、同時期と思われる他の遺構、特に生活関連遺構は検出されなかつたことから道路関連遺構ではないかと想定し、2条の道路を復元した。まずSD003とSD012を組み合わせたもので①、それぞれ内側に土壌列が伴う、この土壌列については物資運搬のコロに伴う枕木の痕跡、丸太状用具で転圧を行った下部構造の痕跡等の説が出されているが、本調査では溝の底面に付設するものもあり、その性格は明らかにできなかつた。道路幅は溝の心心距離で13m前後を測る。方位は検出長が短いため正確ではないが、N-77°W前後を示すとおもわれる。次にSD006とSD013を組み合わせたもので②、幅は9.5m～10.5mを測る。方位はN-64°Eを示す。

また周囲には水城・鴻臚館を結ぶ駅路が想定されている。方位がありにずれておりそれとは考えられないが、三宅庵寺に接続する道路等、関連する可能性が考えられる。調査上の問題点として、遺構認定の条件である硬化面が検出できなかつたこと（土壌列が下部構造であれば検出は不可能）、推定道路の延長線上で同様のものが現在のところ検出されていないことがあげられる。

最後に、大橋E遺跡は4次にわたる調査のなかでそれぞれの成果を合わせても遺跡としての全体像がなかなか見えてこない。今後の調査に期待したい。

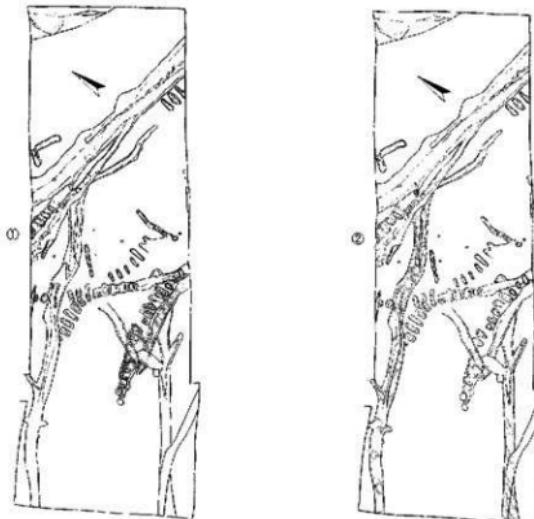


Fig. 5 道路復元案





調査区全景



SD001東壁土層



SD001東壁土層

---

---

## 大橋 E 遺跡 4

福岡市埋蔵文化財調査報告書第511集

1997年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 株式会社トータルプリントイング博多

福岡市南区大楠2丁目21-1

---

